

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 〔書評〕 『林田孝和著作集』 全4巻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森野, 正弘, Morino, Masahiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000730">https://doi.org/10.57529/00000730</a>

〔書評〕

林田孝和著

『林田孝和著作集』全四巻

森野正弘

長らく『源氏物語』の研究の数々を学界に発信し続けてきた林田孝和氏の全四巻から成る著作集が刊行された。林田氏はこれまで、『源氏物語の発想』（桜楓社、昭和五五年）、『王朝びとの精神史』（桜楓社、昭和五八年）、『異郷論—王朝びとの心象—』（桜楓社、昭和六一年）、『源氏物語の精神史研究』（桜楓社、平成五年）、『源氏物語の創意』（おうふう、平成二三年）などの単著を上梓されてきており、本著作集はそれらを軸としつつ、未収録だった論文や著作物をも含めて再編集したものである。編集を担ったのは、竹内正彦氏（全体統括）、津島昭宏氏（第一巻担当）、太田敦子氏（第二巻担当）、春日美穂氏（第三巻担当）、畠山大二郎氏（第四巻担当）の五名である。林田氏は、母校である國學院大學の兼任講師となった昭和四六年四月に國

學院大學物語文学研究会を発足し、多くの学生や卒業生たちと共に『源氏物語』を輪読してこられたのだが、編集にあたった五名はいずれもその門下生となる。なお、これまでの単著刊行時にも折々の門下生たちが編集作業にあたっており、その委細は著作集各巻に収められた「あとがき」に明記されていることを申し添えておく。

著作集の概要を確認しておこう。第一巻「源氏物語の発想」は、第一単著の『源氏物語の発想』を収録し、その後に「源氏物語の発想 追補」として、第三単著の『異郷論—王朝びとの心象—』から六編の論考、『物語文学論究』（國學院大學物語文学研究会）第一三号に寄稿した論考、及び林田氏の共編著『源氏物語事典』（大和書房）で担当した一二編の項目を載せる。巻末には津島昭宏氏の「解説」を付す。

著作集第二巻「源氏物語の精神史研究」は、第四単著の『源氏物語の精神史研究』を収録する。なお、同単著は博士学位請求論文の礎稿となったものであり、第二単著『王朝びとの精神史』から八編、第三単著『異郷論—王朝びとの心象—』から二編の論考を再録するかたちで体系化が図られたという経緯を持つ。また、旧単著の「第四編 源氏物語の人生儀礼」としてまとめられていた一一編の論考は本巻で収録されず、著作集第三

巻に収められることになった。巻末には太田敦子氏の「解説」を付す。

著作集第三巻「源氏物語の創意」は、第五単著の『源氏物語の創意』を収録し、その後、先述した第四単著の「一編の論考」を載せる。巻末には春日美穂氏の「解説」を付す。

著作集第四巻「王朝文学の精神史研究」は、『源氏物語』以外の作品や中古文学に関する論考を集めたもので、「新編 王朝びとの精神史」「新編 異郷論—王朝びとの心象—」、「随想、書評その他」という三部構成となる。そのタイトルからは、第二単著の『王朝びとの精神史』と第三単著の『異郷論—王朝びとの心象—』が収録されているかのように見えるが、そうではない。「新編 王朝びとの精神史」全九章は、『王朝びとの精神史』の論考三編、『異郷論—王朝びとの心象—』の論考一編、及び、単著未収録の論考五編から成る。また、「新編 異郷論—王朝びとの心象—」全七章は、『異郷論—王朝びとの心象—』の論考三編、単著未収録の論考四編から成る。巻末には畠山大二郎氏の「解説」、及び、「林田孝和略年譜」「林田孝和著作目録」を載せ、著作集全体の統括を担った竹内正彦氏の「編集後記」を付す。

以上、全四巻にわたって展開される著者の研究方法を端的に

述べれば、それは民俗学的研究ということになる。では、この民俗学的研究とはいかなるものであるのか。それを紐解くにあたって、まずは『源氏物語必携』（學燈社、昭和五三年）に掲載された池田和臣氏の「研究史と研究書解題」というレビュー論文を顧みておきたい。そこでは「民俗学的研究」が立項され、次のような説明がある。

『折口信夫全集』第八卷（中央公論社、昭30）には、源氏物語の中に第一次性源氏物語、すなわち伝承性を見いだした「日本の創意」が収められている。高崎正秀『源氏物語論』（高崎正秀著作集）第六卷、桜楓社、昭46）。右の折口の発想を継承し源氏の伝承性と作為性をかき分けようとする諸論文を集めたもの。三谷栄一『物語文学史論』（有精堂、昭27）、『日本文学の民俗学的研究』（有精堂、昭35）、『物語史の研究』（有精堂、昭42）、『物語文学の世界』（有精堂、昭50）。第一著作所収の「光源氏型と薫大將型」、第二著作所収の「源氏物語の構造と古代説話の性格—六条院の造営の民俗学的意義」などが注目される。後者は古代の方位信仰によって六条院が當世の国であることを述べたものである。（『源氏物語必携』、一九四頁）

折口信夫は、『源氏物語』の現行文章の間に第一次性源氏物

語と第二次性源氏物語がうかがえるとして、前者を「著しく、伝承色彩の多いもの」とし、「小説の第一層と、第二層とを分つ準拠となるものは、伝承性と、作為性にある」とした。その発想を継承したのが高崎正秀であり、三谷栄一であった。学界は、この伝承性と作為性のうち、特に伝承性に着目する研究を民俗学的研究と称し、分類したのである。また、ここに紹介されている三氏がいずれも國學院大學の出身者であるところから、伝承性に着目する民俗学的研究は國學院大學の学統として捉えられることにもなった。

『源氏物語必携』の刊行から四年後、続編が出版されることになる。『源氏物語必携Ⅱ』（學燈社、昭和五七年）である。前者が『源氏物語』の巻毎の解説を主眼とするものであったのに対し、後者は人物毎の解説と研究方法の解説を主軸として構成された。その研究方法の一つに「作為と伝承」があり、執筆を担当したのは他ならぬ林田孝和氏であった。『必携Ⅱ』の時とは異なり、『必携Ⅱ』では見開きで紙幅が与えられている。林田氏は、折口信夫が注目した事例として「光源氏の須磨流謫」と「六条御息所の物の怪」を挙げ、続けて、折口説の核をなす「色好み」に触れる。そして、その実践例として光源氏の「色好み」を取り上げつつ、やがて物語が「若菜」巻以降の第二部

の世界に入るや、「色好み」の倫理が崩壊していく様を素描する。その筆致は、伝承性よりも物語の到達した表現面に比重が置かれており、いわゆる『源氏物語』プロパーの論文として読み得るものとなつている。ともすると論を展開する過程で伝承の世界へと奥深く入り込みがちな民俗学的研究の中にあつて、林田氏の研究はあくまでも『源氏物語』の作品論としてであろうと意識しているかのようである。こういったスタンスは、研究の始発の時点で既に表明されてもいた。

いうまでもなく、古典の生命は永遠である。しかしどんな作品も、その〈時代の子〉である。それゆえ、作品の内包する真実に肉薄するためには、その時代に立脚した作品固有の表現世界の論理のあり方が追尋されなければならぬ。本書はそうした『源氏物語』の有する固有の表現論理を、主に民俗学的方法によつて闡明しようとする試みの論である。つまり、この物語が平安中期という時代の中で、どのような表現の論理によつて、不朽の古典としての〈不易〉の世界を獲得していったかを究明しようとする作品論である。（著作集第一巻、二七七頁）

これは、林田氏の第一単著『源氏物語の発想』の「あとがき」に書かれたものである。林田氏にとって、民俗学はあくまでも

手段であり、研究の目的は『源氏物語』の表現世界の論理を明らかにするところにある。この姿勢は第四単著の『源氏物語の精神史研究』においても保持されている。

このたび〈発想〉ではなく、〈精神史〉と題するのは、わたしなりの目的と意図とをもってのことである。『源氏物語』にはたしかに無尽蔵ともいえる伝承的事実が織りこまれてはいる。だが、伝承や民俗が存在するからといって『源氏物語』が成立したわけではない。高次の仮構の文学としてその表現を獲得していく過程にあつて、爛熟しきつた平安期の貴族社会に身をおき、種々の人間模様を凝視してやまぬ物語作者の、冷徹な目とあくなき創作意識があつたのである。(著作集第二卷、一六頁)

ここにかがえるのは『源氏物語』が伝承の数々をそのまま収載した説話集などではなく、物語作者の個人的な営みとして書かれた文学作品としてあるという文学観であろう。作品に織り込まれている伝承や民俗は物語作者の創作意識をいったん経由し、言語によって表現されたなかにあるという見立てとなる。こうして見てみると、〈発想〉から〈精神史〉へという展開は作品を伝承や民俗の世界へ開いていくのではなく、「平安期の貴族社会に身をおく」物語作者の、更にその内面世界へと観察

範囲を絞り込んでいく試みであるように思えてくる。因みに、この〈精神史〉という概念がかなり早い段階から林田氏の念頭にあつたものであることは、氏の第二単著の書名が『王朝びとの精神史』であることから推測される。また、第五単著の書名が『源氏物語の創意』であり、その「序章」において、「本書では『源氏物語』が持つそうした重層する表現構造のなかにあつて、作者がどのような創意工夫を凝らし、固有の表現を獲得していくのかを読み解くことに、より重きを置いて立論してみた」(著作集第三卷、一八〇九頁)と述べていることを顧みれば、やはり林田氏は『源氏物語』を伝承の産物としてではなく、物語作者の創作物として位置づけていることがうかがえる。なお、この「創意」という語が折口信夫の『源氏物語』論の題目「日本の創意」にも使われていたことを思い起こしておきたい。

さて、民俗学的研究を標榜し、実際に論考の中でも豊富な民俗学的知見を披露する林田氏が、なぜ伝承の世界ではなく、個人の精神世界へと収斂していく方向性に拘るのか。それを考えるうえで参考になるのが次の秋山虔氏の見解である。

源氏物語を伝誦的なものに解体してしまうことによつて、その一一世紀初頭という特定の時期における一回性的な成立の秘密は、ほとんど顧みられなくなる。その成立の時点

の現実との関係が問われないのである。もちろん、文字的作品として定着したものの背後に分厚く生きつづける固有信仰を究明することは、たしかに源氏物語を古代性においてとらえるに不可避の道であるにはちがいないのである。こうした観点は今後いよいよ重要性を増すことが予想されるが、伝承というものは、それじたいとして生きながらえる有機体ではあるまい。変らないような形態をもちつづけられ変化して行くのであつて、というより変化発展の形式として不変的な性格をも保持しているのであろう。

これは、『国文学・解釈と鑑賞』第二二巻・第一〇号(至文堂、昭和三二年一〇月一日)に掲載された「源氏物語の歴史―これまでの人々は源氏物語をどう評論しどうみてきたか」というレビュー論文の一節である。この記事で、秋山氏は折口信夫や高崎正秀の民俗学的研究を紹介しつつ、その研究方法に対して疑義を呈する。右に掲げた文章は、林田氏の「源氏物語の民俗学的研究」(著作集第二巻所収)にも引用されているのだが、実は続きがある。

高崎博士が―折口博士もそうであるが―、縦横無尽に古伝承の世界を遊弋されるとき、そこでは歴史的時間は静止する。かえつて具体的な生きた生活史が捨象されてしまつて

いるという印象をもたせられるのである。文学を信仰や伝承のくびきから解放させるものは何か。そうした場合の個人の役割は如何。伝統を媒介することによつて新たな伝統をつくりかえて行く人間の創造をどのように歴史的に解明して行つたらよいのであろうか、等々の疑問にこたえてくれる民俗学的国文学の研究が期待されているのだし、この学統に立つ新進の研究者の方法論的模索は、その意味で注目されるであらう。

この秋山氏の批判は、共時的な発想のもとに見えてくる風景を通時的な視点で説明しろという無理な注文であつたのだが、今それについては措くとして、林田氏はこの注文に応えるべく、「今後の民俗学的研究の方位として、作品の成立した時代の(伝承性)の究明が要求される。しかもその伝承性がどのように旺盛な作者の創意のなかに吸いあげられ、不朽の作品として再生・仮構されていくのか、そのプロセスが跡づけられなければならない」(著作集第二巻、二八六―七頁)という提言を行つたのではないか。なかでも、同時代の(伝承性)に対する氏の拘りは強く、「(民俗学の)論理の根柢を、可能なかぎり平安時代の文物のなかにもとめて、私見の実証に努めた」(著作集第一巻、二七七頁)、「作品が時代の産物である以上、その作品の成立し

た時代の、あるいはそれに近い文献資料での博証の努力も怠つてはなるまい」（著作集第二巻、二八五頁）と、同じ趣旨の発言が繰り返される。

一例を挙げてみよう。「源氏物語『車争ひ』の背景」（著作集第一巻所収）は、『源氏物語』の「葵」巻に描かれている（車争ひ）を論じたもの。葵祭の御禊の日、物見車の立て場所をめぐって六条御息所の車を葵の上方の従者たちが打ち壊してしまふという事件が起きる。本論では、この葵の上と六条御息所の関係を前妻と後妻の關係に見立て、そこに〈後妻打ち〉の習俗が透かし見えてくるという読解を試みる。〈後妻打ち〉とは、前妻が後妻に暴力をふるうというもので、妻の座が移行するためのある種の通過儀礼として行われていたとされる。林田氏は、この〈後妻打ち〉の語やそれに相当する出来事が、『梁塵秘抄』巻二・三七八、『宝物集』、『台記』康治二年一月七日条、『権記』寛弘七年二月一日条、『御堂閔白記』寛弘九年二月二五日条などの記事に見えることを紹介し、『源氏物語』が成立したとされる寛弘五年当時、「後妻打ちを是として許容する一般認識」があった可能性を示唆する。その上で、そういった通過儀礼に耐えきれず、生霊化してしまった六条御息所の情念を描いているところに「物語作者の手腕」が認められると結論づける。

さて、このように各種の文献によって〈後妻打ち〉の習俗が紹介され、なかでも『権記』や『御堂閔白記』といった古記録の記事が動員されたことで、その習俗が寛弘年間にも行われていた蓋然性が高まり、それを疑う声も封じられることになる。「一一世紀初頭という特定の時期における一回性的な成立の秘密」を「歴史的に解明」せよという注文に応える民俗学的研究の一つの姿がここに示されたと言ってもよい。

ここでもう一つ、「杵をめぐつての伝承—伊勢物語六十五段を中心に—」（著作集第四巻所収）という論考を取り上げておきたい。これは、『伊勢物語』の六五段において、男が女の家を訪れた際に、自分の履いてきた「杵」を投げ入れるという行為が描かれているのであるが、その行為の持つ意味を民俗学的に考察したものである。林田氏は、草履や下駄などの履物が婚姻に関わって用いられる民俗事例を紹介し、『伊勢物語』の杵を投げ入れる男の行為には求婚の意味が込められていたと説く。氏は更に、「このような民俗資料のみで論断することは、極力さしひかえなければなるまい。なぜなら、その物語の享受層が平安以来、永く上流社会の人々によって占められていたからである」として、平安期の貴族社会において婚姻の際に行われた〈杵取りの儀〉を俎上に載せてゆく。これは、婿の足が嫁

のもとにとどまることを祈願して、婚禮の期間中、婿の履いて来た沓を嫁の両親が夜ごとを抱いて寝るといふもので、『江家次第』、『栄花物語』巻三四、『行親卿記』長暦元年一月一三日条などの記事に見えることが紹介される。ここでも伝承と作品の接点が史実によって保証されてゆくののであるが、そうした実証的な手続きは確かに論の強度を増すことに寄与しており、手堅い印象を与えもする。だが、そのような論証の過程で差し挟まれてくる次のような一節に出会った時に、思わず胸が高鳴るのはなぜであろうか。

沓と婚姻とが密接なかかわりをもつことは、周知のとおりである。有名なシンデレラ物語をみてもシンデレラの落としていった小さなガラスの沓が縁となり、姫はめでたく王子と結ばれる。(著作集第四巻、三〇頁)

いくつもの史料を積み重ねることで、立てられた仮説は史実に囲まれてゆき、物語作者の脳裏に伝承がインプットされていた可能性が限りなく現実のものとしてゆく。しかし、おとぎ話を例に挙げて説明してもらった方が私にはリアリティが感じられてならない。それは理屈というより、実感に近いものかもしれない。そして、民俗学的研究の魅力とは、もしかしたらそんなところにあるのではないかとも思われてくる。

先に私は、民俗学的研究に対する秋山氏の批判を「共時的な発想のもとに見えてくる風景を通時的な視点で説明しろ」という無理な注文」と評した。通時的な視点とは、歴史という時間軸を指標にして出来事を位置づけることである。留意すべきは、この場合の時間が過去から現在へと変化し続ける不可逆なシークエンスとして展望されている点である。そういった変化の連続相にあつて、出来事もまた、次の瞬間には過去のものとなり、それゆえに一回性的な側面が強調されることにもなる。これに対して共時的な視点とはどのようなものか。それは、時間軸の上ではなく、ある体系の中で出来事を位置づけることだと言えよう。この時、出来事の持つ意味は単独では測れず、その体系の中でいかなる構成要素として機能しているかという観点から説明されることになる。留意すべきは、こういった分析が原理的には体系を俯瞰することでしか行えず、したがって変化を扱えないという点である。重要なのは全体の構造の中での役割であり、個々の要素(出来事)がどのような順番で継起したかはあまり意味がない。

試みに、婚姻のルールを顧みてみよう。西洋の王国と東洋の島国で婚姻に沓(靴)が介在するという類似した現象が観察されたとする。この時、(A)このルールが適用された時期を特

定し、先後関係を見極めたうえで伝播の過程を調べようとするのが通時的な視点である。これに対し、(B) 人類が営む共同体では、洋の東西にかかわらず一定のルールが生まれるという前提に立ち、王国や島国に共通する婚姻の構造を抽出しようとするのが共時的な視点である。(A) は西洋と東洋を先後関係で分けようとするものであり、ともするとそれは優劣の関係へと置き換えられかねない。このような「歴史」の危うさ、乃至はイデオロギー的側面を相対化するものとして、(B) の共時的な視点は有効だったのではあるまいか。共時的な視点ははしたがって、何かを特権的に扱うことには不向きな方法と言えるかもしれない。

普遍的な構造は汎用性に富むものであるが、それを手に入れる過程で個別具体的な要素を捨象しなければならない。林田氏の抽出した「杳と婚姻」というモチーフは、隘路に陥っていた『伊勢物語』六五段の解釈を見事に読み解く回路を開くことになった。また、その論を展開する過程で『源氏物語』「常夏」巻に描かれている光源氏と玉鬘の会話、催馬楽「貫河」の詞章、『枕草子』五六段の方弘の逸話などが取り上げられ、次々に通行とは異なる解釈が示されることにもなっている。ということはずなわち、この論考がそれぞれの作品論として展開される可

能性もあつたということであろう。しかし、翻ってそれは、本論が『伊勢物語』論として書かれなければならないかつた必然性を低減してしまうことにもなりはしないか。そう考えた時、本論は「杳と婚姻」をめぐる民俗の研究へと収斂していく過程にあるようにも思えてくる。

さて、ここまで述べてきた通り、林田氏の研究方法の特徴は民俗学の知見を導入する点に求められ、それは折口信夫や高崎正秀などによって切り拓かれた学統を継承するものでもあつたわけであるが、そのことに関連して、本著作集の全体統括を担当した竹内正彦氏の発言を引用しておきたい。

学統の継承とは、もちろん、その研究方法を模倣することではなく、ましてや先師の考えや説を墨守することではない。学統の継承とは、師やその師たちの精神をわが精神としながら、不断にその方法を問い直しつつ、師やその師たちがめざした、さらにその先をめざしていくことである。それは、けつして生やさしいことではない。学統に対する厳しい批判をも含めて引き受ける覚悟と、学統に対する揺らぐことのない自負がなければ、成し遂げられるものではない。林田先生はそれを選びとり、ご自身の研究の中核に据えられたのであつた。

(著作集第四卷「編集後記」、三五二頁)

何気なく頁をめくっていた私が思わず目を留めたのが、「学統に対する厳しい批判をも含めて引き受ける覚悟」とある一節である。先にも触れた通り、『源氏物語必携Ⅱ』で林田氏に宛がわれた項目は「作為と伝承」であった。この『必携』シリーズが寿命の長い書物であったこともあり、勢い、この術語が林田氏の名前とセットになって巷間に流布することにもなったが、これは折口信夫の『源氏物語』観として発せられた「伝承性」と、作為性」という言葉を承けたものとなる。その語順が変更された理由は不明だが、林田氏の民俗学的研究は「作為」のもとに「伝承」が説明されるかたちで、あくまでも『源氏物語』の作品論として発信されてきた。果たしてそのことがいかに論を制約することになったか。私からすれば、「伝承」よりも「作為」こそ、まさにくびきに他ならない。しかし、その困難な道の方をあえて選び、文献資料によって民俗学的な解釈の妥当性を担保していくという方法を模索し、林田氏は『源氏物語』研究の現場に適応してきた。研究を領導する方法論が見当たらない現在の状況を顧みるに、民俗学的研究によって不可視のシステムを明らかにしてきた林田氏の足跡を追体験できる本著作集の刊行は、時宜を得た企画であると思われる。

(A5判上製函入、第一〜四巻、武蔵野書院、二〇二二年五月発行、定価各巻五七〇〇円＋税)